

熊本方言における「が」と「の」の使い分けに関して

著者	加藤 幸子
雑誌名	言語科学論集
巻	9
ページ	25-36
発行年	2005-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/48291

熊本方言における「が」と「の」の使い分けに関して

加藤 幸子

キーワード：格標識、主格、語順、方言研究

要 旨

本稿は、熊本方言に見られる主格「が」と「の」の使い分けに関して、語順との関係から考察し、「が」と「の」の分布を明らかにしたものである。従来、「が」と「の」の使い分けは、意味的違いに基づくものであるとされてきたが、熊本方言における「が」と「の」の使い分けは、「が」名詞句と「の」名詞句の構造上の位置の相違を反映したものでもあることを示した。また、方言研究の重要性に関しても論じている。

1. はじめに

肥筑方言では標準語には見られない「主格」の使い分けがあることが知られている。次の例を見てみよう。

(1) 標準語

雨が降った

cf. *雨の降った

(2) 肥筑方言

a. 雨が降った

b. 雨の降った

(神部, 1992)

標準語では、(1)に示されるように、主格を表す格標識として「が」が使われる。それに対し、熊本方言や佐賀方言を含む肥筑方言では、(2)に示されるように、標準語の「が」に対して「が」または「の」のいずれかの使用が可能である。

しかしながら、常に標準語の「が」が肥筑方言において「の」に置き換えられるわけではない。(3)のように、他動詞の主語は「の」に置き換えると非文法的な文になる。

(3) 熊本方言

a. 太郎が 中国語ば 話したばい

b. ?*太郎の 中国語ば 話したばい

だが、(3b)は主語と目的語を入れ替え、語順を変えると(4b)のように文法的な文になる。

(4) 熊本方言

a. 中国語ば 太郎が 話したばい

b. 中国語ば 太郎の 話したばい

(4b)では主語「太郎」の格標示は、(3b)の場合と異なり、「の」の使用が可能である。

ところが興味深いことに、語順を変えても依然として「の」の使用が不可能な場合もある。¹

(5) 熊本方言

a. 太郎が 英語の でくと (標準語：太郎が英語ができる)

b. * 太郎の 英語の でくと

(6) 熊本方言

a. * 英語が 太郎の でくとb. * 英語の 太郎の でくと

先程見たように、(3b)は(4b)のように語順を変えると文法的な文になるのに対して、(5b)は(6)に示されるように、たとえ語順を変えたとしても、主語「太郎」の格標示が「の」の場合、文法性は変わらない。²

従来の先行研究では「が」と「の」の使い分けの要因として、尊卑と主語のとりたて・強調ということが言われてきたが、語順により「が」と「の」の容認度が変わることとは述べられていない。そこで本稿では、肥筑方言の中の熊本方言を中心に取り上げ、今までの研究では考慮されていない語順との関係を考慮しながら、熊本方言における「が」と「の」の分布、および使い分けを明らかにする。

「が」と「の」の使用は、意味の違いのみならず、認可される構造的位置を反映したものであることを示す。また、日本語（標準語）では、時制を持つ一文中に主格「が」が多重に出現できるという点で他の言語と異なると言われてきたが、熊本方言の「が」と「の」の分布を見ることにより、日本語においても主格は一つのみ許されるのではないかということを示す。

次節では、まず標準語の「が」、そして熊本方言および佐賀方言における「が」と「の」の使い分けに関する先行研究を概観する。熊本方言における「が」と「の」の使い分けは尊卑によるものとされてきたが、意味的な要因が尊卑による要因よ

りも「が」と「の」使い分けに影響を与えているという最近の研究を取り上げる。第三節では、熊本方言における「が」と「の」の使い分けに関して、語順との関係から考察する。「が」と「の」の分布は、ただ単に意味の違いによるものだけではなく、統語構造上の位置の相違をも反映しているということを示す。第四節では、方言研究の生成文法理論への貢献について述べ、まとめとする。

2. 先行研究

2.1. 標準語の「が」

久野 (1973) では標準語の主格は「が」で表されるが、「が」には意味の違いから二種類あるとしている。中立叙述の「が」と総記の「が」である。中立叙述の「が」は事実を客観的に描写する場合に用いられ、述語が動作、存在、または一時的な状態を表す場合に使用される。

(7) 中立叙述の「が」

- a. 手紙が来た
- b. 雨が降っている
- c. 机の上に本がある
- d. おや、あそこに太郎がいる

(久野, 1973)

それに対し、総記の「が」は「今問題にしている事物の中で…なのは、…です」「今問題にしている事物の中で太郎だけが…」といった、とりたて・強調の解釈を示す。³ 述部が恒常的状态または習慣的動作を表す場合は、総記の「が」のみが可能である。また、総記の「が」の使用は述部が動作、存在、一時的状態のときにも可能である。(8)が総記の「が」の代表的な例である。

(8) 総記の「が」

- a. 太郎が 学生です
- b. 猿が 人間の祖先です
- c. 太郎が 日本語が できる

(久野, 1973)

総記の「が」に関しては、文脈がないと座りが悪くなるため、総記の解釈を自然にする文脈が必要とされる。したがって、(8)の文は(9)のような質問の答えとして使われると自然である。

- (9) a. 誰が 学生ですか
- b. 何が 人間の祖先ですか
- c. 誰が 日本語が できるか

久野(1972)では、標準語の「が」に関して総記と中立叙述という解釈の差の他に、「は」が旧情報を示す標識であることと対比して、「が」は新情報をあらわす標識でもあるということも述べられている。

(10) 新情報「が」

主文の主語に現れる「が」は名詞句がその文の中で、新しいインフォメーション(すなわち、文脈から予測することができないインフォメーション)を表すことをマークする標識である。(久野 1973: 210)

2.2. 肥筑方言(熊本・佐賀方言)の「が」と「の」

第一節で述べたように、熊本方言や佐賀方言のような肥筑方言では「主格」の表現形式として「が」または「の」が使われる。この「主格」「が」と「の」使い分けの要因として今までに二つのことが言われてきた。まず一つは、尊卑による使い分けである。つまり、敬意を含める場合の「主格」には「の」を用い、卑下の意を表す場合や侮蔑の意を含める場合の「主格」には「が」を用いるということである。たとえば、秋山・吉岡(1991)では、「格助詞の『ノ』と『ガ』は、…(中略)…、古典と同様に『ノ』は尊敬の場合に、『ガ』はやや見下げの場合にと使い分ける(211)」と述べられている。そしてもう一つは、尊卑による使い分けではなく、強調による使い分けである。神部(1992)では、九州西北部の方言、つまり肥筑方言では、尊卑による使い分けは見られず、主部を限定し、特立する場合に「が」が用いられると述べられている。

これらの要因を検討したものに初島(1998)がある。初島(1998)は佐賀東部地区の10代から60代の男女19人にアンケート調査を実施し、強調による使い分けが尊卑による使い分けよりも強い要因であると結論付けている。⁴そして、総記を表す形式が「が」であり、中立叙述を表す形式が「の」であるとした。すなわち、標準語では同じ標識「が」が中立叙述、総記のどちらをも表したわけだが、佐賀方言ではこの両者を使い分けているということである。

では、具体的に初島(1998)を見る。初島が用いた調査文は(11)-(15)である。

- (11) サッキ ____ (ガ/ノ) ユータゴト シユウカイ
(さっき____が言ったようにしよう)
- (12) ____ (ガ/ノ) オランギー、ワカランヤローニャー
(____がいなければ、わからないだろうなあ)
- (13) ____ (ガ/ノ) 行ッタバッテン、会エンヤッタロウ

(__が行ったけど、会えなかったでしょう)

(14) __ (ガノ) 聞イタケン 間違イナカバンタ

(__が聞いたから間違いないですよ)

(15) コン中ジャー __ (ガノ) 外国ニ 行ッタトバイ

(この中では__が外国に行ったんだよ)

(11)–(13)は、述語が動作や存在を表すので、中立叙述と総記の解釈が両方可能な文であり、(14)、(15)の文は総記の意味合いが強い文になっている。これらの文の主語に、一人称、二人称、そして三人称の様々な人称表現を入れ、それぞれ「が」を使うか「の」を使うかを調べている。また、それぞれの文に対して、述語を尊敬表現に変えた文を作り、それらに対しても同じ調査をしている。

初島の結果によると、主語が敬意の払われる名詞、たとえば「町長さん」のような名詞のとき、また述語が敬語になるときに熟年層、中年層で「の」を使う傾向があるということである。⁵ しかし、総記の解釈しか許されない(15)では、「の」だけと答えた人はいないということである。さらに(15)の文は、敬意を表す文においても、ほとんどの人が「が」しか使わないことである。したがって、初島は総記のときに「が」、中立叙述のときに「の」を使うという使い分けがされているとし、強調による使い分けが尊卑による使い分けよりも強い要因であると結論付けた。

次に、やはり「が」と「の」の使い分けは解釈の違いであるという結論に達した研究に、吉村 (1994) がある。吉村 (1994) は、熊本 (八代) 方言の多重主格構文における「が」と「の」の分布を考察している。^{6,7}

(16) 熊本が馬肉がうまい (標準語)

(17) a. * 熊本の馬肉のうまか (「熊本の馬肉」という解釈)

b. * 熊本が馬肉がうまか (「馬肉」は総記の解釈)

c. 熊本が馬肉のうまか (吉村, 1994: 19)

(16)に見られるように、標準語では叙述の主語「馬肉」も大主語 (Major Subject) 「熊本」も共に「が」により格標示される。一方、熊本方言では、(17)に示すように、(16)の表現に値する表現は(17c)のみであるということである。(17a)の「熊本の」には「馬肉」を修飾する名詞修飾の意味しかない。また、(17b)には「馬肉」を総記の解釈と取る解釈しかなく、(16)の表現には値しないということである。つまり、熊本方言では叙述主語の名詞句は「の」により格標示され、他方、大主語の名詞句は「が」で格標示されることがわかる。ここで重要なのは、総記の解釈

の「熊本」は「の」で標示される可能性がないことである。

以上をまとめると、肥筑方言における「が」と「の」の使い分けには、尊卑による要因もあるが、それ以上に総記か中立叙述かという意味的な違いによる要因が大きく働いているということがわかる。

3. 熊本方言の「が」と「の」の分布

この節では、前節で見た「が」と「の」の使い分けが意味的な違いに関係していることを新たな例を提示しながら確認すると共に、「が」と「の」の分布を今まであまり考慮されてこなかった語順との関係から考察する。

前節で述べたように、肥筑方言では、とりたて・強調のとき、つまり総記の解釈のときの主語名詞句には「が」で標示されるということであった。次の例はこの観察を支持するものである。

(18) 請求書が/の 届いたばい

(19) 請求書だけが/*の 届いたばい

(18)では、主語「請求書」には、意味の違いはあるにせよ、「が」でも「の」使うことができる。しかし、主語名詞句を取り立てるような表現、たとえば「だけ」を付け加えると、(19)に示されるように「の」の使用が不可能になる。(20)、(21)の例も同じ点を示している。

(20) 英語ば 太郎の 話したばい

(21) 英語ば 太郎だけが/*の 話したばい

つまりこれらの例からは、とりたてて強調される場合には「が」を使うことが伺える。

また、「が」が卑下するときに使われるわけではないということは次の例からわかる。

(22) 人形ん足でっちゃ、三郎さんが作りよらすとに…

(秋山・吉岡, 1991:47)

(22)では、動詞に「作りよらす」と尊敬表現が用いられている。にもかかわらず主語「三郎さん」は「の」ではなく「が」で表されている。もし、「が」が卑下を表すために使われるのであれば、述語の尊敬表現と相反するので、このような状況では使われないことになる。つまり、(22)は尊卑による使い分けよりも、強調という意味的な要因が強く働いていることを示した例であるといえる。

「が」と「の」の使い分けは、意味的な要因によることが大きいことが明らか

になった訳であるが、以下、例を見ていくと明らかになるように、「が」と「の」の分布はそれほど単純ではない。では、早速、「が」と「の」の分布を詳しく見ていくことにしよう。

以下の例は、「が」と「の」の意味的な相違はさておき、「が」または「の」そのものを使うことができるかを調べたものである。(23)–(28)は、基本語順における「が」と「の」の分布例である。

(23) 他動詞文

太郎が/*の そんな小説ば こーたばい

(太郎が その小説を 買った)

(24) 自動詞 (非対格動詞)

小包が/の 届いたとたい

(小包が 届いたよ)

(25) 自動詞 (非能格動詞)

太郎が/*の (一生懸命) 働いたとたい

(太郎が (一生懸命) 働いたよ)

(26) 状態述語文 (主格目的語構文)

a. 太郎が 英語がでくると

(太郎が英語ができる)

b. 太郎が 英語の でくると

c. * 太郎の 英語がでくると

d. * 太郎の 英語の でくると

(27) 状態述語文 (形容詞/形容動詞述語)

a. 太郎が 野球がじょうずたい

(太郎が野球が上手だ)

b. 太郎が 野球の じょうずたい

c. * 太郎の 野球がじょうずたい

d. * 太郎の 野球の じょうずたい

(28) 多重主格構文

a. 熊本が スイカ畑が 多かばい

(熊本がスイカ畑が多い)

b. 熊本が スイカ畑の 多かばい

c. * 熊本の スイカ畑が 多かばい

d. * 熊本の スイカ畑の 多かばい

上記の例から、他動詞の主語、非能格動詞の主語、状態述語文の主語、大主語には、「の」を使うことができないことがわかる。解釈に違いはあるにせよ、「が」と「の」を両方使うことができるのは、非対格動詞の主語、主格目的語、そして多重主格構文の叙述の主語である。

では次に、語順を替えた例、すなわちスクランプリングの例を見てみよう。⁸ 語順を入れ替えると、「が」と「の」の分布が変わることに注意されたい。

(29) 他動詞文 スクランプリング

そんな小説ば 太郎が/の こーたばい

(その小説を太郎が買った)

(30) 状態述語文 (主格目的語構文) スクランプリング

a. 英語が 太郎が できる

(英語が太郎ができる)

b. * 英語の 太郎が できる

c. * 英語が 太郎の できる

d. * 英語の 太郎の できる

(31) 状態述語文 (形容詞/形容動詞述語) スクランプリング

a. 野球が 太郎が じょうずたい

(野球が太郎が上手だ)

b. * 野球の 太郎が じょうずたい

c. * 野球が 太郎の じょうずたい

d. * 野球の 太郎の じょうずたい

(32) 多重主格構文 スクランプリング

a. スイカ畑が 熊本が 多かばい

(スイカ畑が熊本が多い)

b. * スイカ畑の 熊本が 多かばい

c. * スイカ畑が 熊本の 多かばい

d. * スイカ畑の 熊本の 多かばい

第一節で触れたように、他動詞の主語は語順を変えると「の」を伴って出現可能になる。しかし、状態述語文の主語と大主語は語順を変えたところで「の」を使用できるようにはならない。意味的な要因のみにより「が」と「の」のどちらかをを使うのが決まるのであれば、語順を変えたところで、文法性が下がることは

ないように思われる。しかし、実際には(30b)、(31b)、(32b)のように、語順を変えると非文になってしまう例がある。これらの例は、「が」と「の」の使い分けは、ただ単に意味的な違いを反映しただけのものではなく、「が」と「の」が認可される構造上の位置の違いがあるということを示唆していると思われる。スクランプリングの移動先が[Spec, IP]の位置またはIPに付加した位置であるとする、スクランプリングして文頭に出た名詞句は「の」では表示されないという事実は、「の」は[Spec, IP]以上の位置では付与されないことを示していると取れる。さらに、このことを踏まえた上で、(29)を見ると、(29)の主語「太郎」は「の」でマークされることから、IPより下、つまりvPの中に留まっているということがわかる。また、(30c)、(31c)、そして(32)が非文法的であることから、状態述語文における主語と大主語はvP内にはない、さらに言うと、vP内には生成されない、留められないということがわかる。つまり、「が」は[Spec, IP]以上の位置で認可され、「の」はvP内で認可されるということになる。また、「が」と「の」がそれぞれ総記と中立叙述という解釈と結びついているとすると、構造上の位置と意味関係がリンクしているということになるだろう。

ところで、上記の例は、「が」名詞句と「の」名詞句が構造上異なる位置にあるということだけを示唆しているのではない。上記の状態述語文の例、また、多重主格構文の例は、「が」は一時制節中に複数可能であるが、「の」は一時制節中に一つ以上現れることがないということも示唆していると受け取れる。

さて、「が」と「の」の分布に関してもう少し、付け加えておきたいことがある。「が」と「の」の分布は従属節に埋め込んでも上記の例の分布と変わらない。では、いくつか例を挙げる。

- (33) もし太郎が/*の 英語ば 話したら、みんなたまがるね
 (もし太郎が英語を話したら、みんなびつくりするね)
- (34) もし太郎が/*の スキーの/が できるなら…
 (もし太郎がスキーができるなら…)

従属節に埋め込んだ場合でも、(33)や(34)のように、他動詞の主語や状態述語文の主語は「の」では格標示されない。これはある意味興味深い。久野 (1973) によると、従属節内では中立叙述・総記の「が」の区別は中和され、総記の意味はなくなることであるが、熊本方言において、「が」が久野 (1973) の言う総記の「が」、そして「の」が中立叙述の「が」であるとする、従属節内では「が」が観察されないという予測をするが、実際には(33)、(34)のよう可能である。熊本

方言では、従属節内でも「が」と「の」の使い分けが存在するのであるから、中総記の中和は実際には起きていないということを示唆しているとも取れる。

以上、「が」と「の」の分布を語順との関係から考察してきた。ここで明らかにされたことは、「が」と「の」の使い分けは、意味的な違いにのみ基づいた使い分けだけではなく、名詞句の構造上の位置をも反映したものであるということである。

4. 方言研究の重要性～まとめにかえて

本稿では、熊本方言の「が」と「の」の使い分けを考察してきた。この節では、この「が」と「の」の使い分けという現象が生成文法研究に与える影響、貢献について考えて、結びとしたい。

まず、スクランプリングの研究に対して、熊本方言の「が」と「の」の分布は疑問を問いかけることになる。日本語におけるスクランプリングの研究は今まで非常に盛んに研究されてきている。そこでは、スクランプリングする前の文と後の文とでは、ただ単に語順が変化しただけであると捉えられてきた。しかしながら、熊本方言を見ることにより、必ずしもスクランプリングは語順が変化しただけの現象とは言えないことが分る。

(35) 標準語

- a. 太郎が 英語を 話した
- b. 英語を 太郎が 読んだ

(36) 熊本方言

太郎が 英語ば 話した

(37) 熊本方言 (スクランプリング)

- a. 英語ば 太郎が 話した
- b. 英語ば 太郎の 話した

(35)の標準語では、(a)と(b)は語順が入れ替わっただけのように見える。しかし、熊本方言では、(36)の文に対応するスクランプリング文は(37a)と(37b)の二種類の可能性がある。標準語では(37a,b)の「が」と「の」の差は形式として現れないため外見からは分らない。しかし、実は(35b)は、(37a)と(37b)の両方の可能性があるということになる。標準語でも「が」には、総記の「が」と中立叙述の「が」と二種類あるわけであるから、スクランプリングの現象を扱う際には、この二種類の「が」をきちんと区別しなければならないということになる。これは標準語の

みを見ていたのでは気づかないことであろう。

最後にもう一つ熊本方言が生成文法理論に貢献すると思われる現象を取り上げる。日本語（標準語）では、多重に主格が現れるとされている。

(38) 熊本が スイカ畑が 多い

(38)において、「熊本」も「スイカ畑」も主格「が」でマークされるからである。この現象から、日本語は主格を多重に認可できる言語であるとされ、主格の認可に関して他の言語とは異なると言われている。しかし、熊本方言を考察すると、一節中に多重に可能なのは「が」であり「の」は多重には現れ得ない。

- (39) a. 熊本が スイカ畑の 多か
b. 熊本が スイカ畑が 多か
c. * 熊本の スイカ畑の 多か
d. * 熊本の スイカ畑が 多か

一般に、熊本方言において、主格の具現であるとされるのは、「の」であると考えられている。こう考えられる理由は、「の」は意味的に中立であり「が」のように特殊な意味合いが含まれないことからである。主格は「の」であり「が」はフォーカスを表す標識であるとなれば、日本語においても主格は一つのみ認可されるということになる。標準語では、熊本方言のような「が」と「の」の差がないため、主格がいくつも可能であるように見えたに過ぎないことになる。

このように、方言からは標準語を対象にした研究からは見えてこないことが明らかになる可能性がある。その意味で方言研究は生成文法理論の発展に欠かせないものであるといえる。

注

* 本稿は九州方言研究会第 19-回研究発表会において口頭発表した原稿を加筆修正したものである。研究会の参加者の方々から貴重なご意見をいただいた。心より感謝の意を表したい。また、熊本方言のデータを集める際に、村上敬一先生、藤本憲信氏をはじめ多くの方々にお世話になった。心から感謝申し上げる。

(1) 熊本方言では、対格は「ば」で表される。

(2) かき混ぜ文では、(i)のように主語も目的語も「が」で表されたときのみ文法的な文になる。

(i) 英語が 太郎が できると

状態述語動詞を用いた文における可能な格配列は後に詳しく述べる。

- (3) 久野 (1973) は、総記の解釈は排他性およびフォーカスの解釈であるとするが、これには異論がある。青柳 (1999) では、総記の解釈には総称的解釈と義務的焦点の解釈が含まれるとしている。
- (4) 初島 (1998) では、尊卑、強調の要因のほか、人称の違いによる使い分けの可能性も検討している。
- (5) 述語を尊敬表現にすると主語に「の」が使われる傾向があるということは、主語と述語の間に一致 (agreement) があるということかもしれない。しかし、後から見るように、「が」と「の」の使い分けは述語が尊敬表現でない場合にも見られる。このことから尊卑による使い分け以外の要因が働いているのは明らかである。
- (6) 吉村 (1994) では、単文の主語は「の」で格標示されるとあり、他動詞文の主語も「の」で格標示されるとしている。しかし、筆者が調べたところ、他動詞文の主語に「の」は許容されないということであった。ただ、「の」を他動詞文の主語にどうしても使いたいなら、述語を敬語にすれば可能であるという意見をインフォーマントから頂いた。吉村 (1994) で示されている例は、いずれも述語に尊敬の表現が含まれている。そのために「の」による格標示が可能になっていると考えられる。
- (7) 吉村 (1994) では主格目的語構文に関しても考察されている。
- (8) (24)、(25)の例は項を一つしか取らない自動詞であるので、スクランプリングの例文は挙げていない。

参考文献

- 青柳 宏 (1999) 「いわゆる『総記』のガに関する覚え書き」、『アカデミア』文学・語学編 第 67 号、南山大学
- 秋山 正次・吉岡 泰夫 (1991) 『暮らしに生きる熊本の方言』、熊本日日新聞社
- 神部 宏泰 (1992) 『九州方言の表現的研究』、和泉書院
- 九州方言学会 (編) (1991) 『吸収方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』、大修館
- 初島 康子 (1998) 「佐賀方言の研究-主格の助詞『ノ』と『ガ』の使い分けについて」、『東京女子大学言語文化研究』7: 51-64、東京女子大学
- 吉村 紀子 (1994) 『『が』の問題』、『変容する言語文化研究』、静岡県立大学